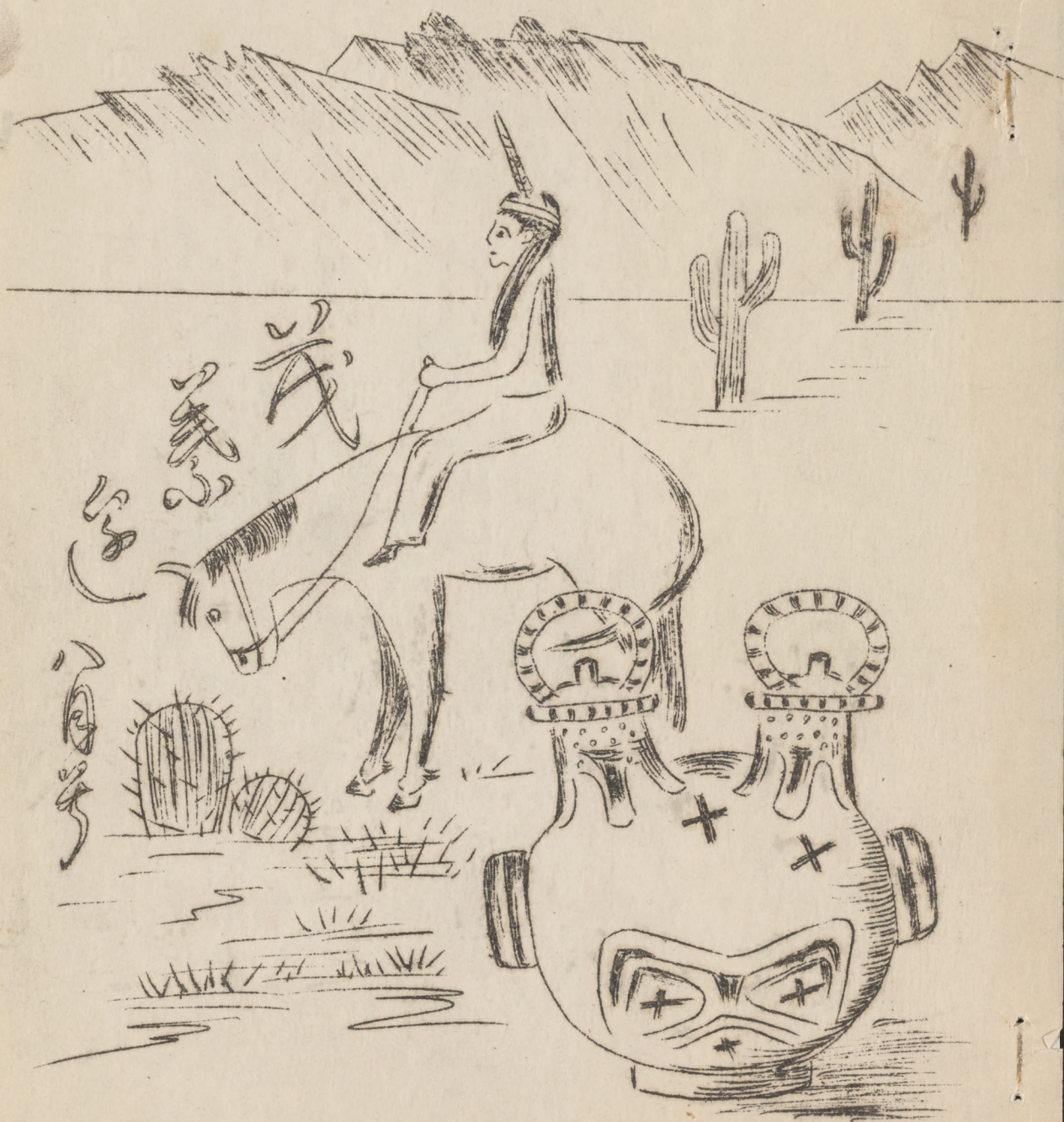


J2.991:1

1083

67/14
C



文藝同人雑誌

モハベ第六號

八月十五日發行

ポストン第三館有、三〇二。

目次

如是我觀

一と歳の想ひ出

人生の山河を越へて

星の降る夜

移民の牧歌

詩友

過去の線路

都々逸

蜀山人片語

コロラド河夜曲

或手紙

假名について

〇題

創作平和

モハベ俳句

モハベ川柳

マシガナ川柳

海紅紙新俳句

私信中より

短歌
ポストンより

川崎規矩雄

増本美篠

山北凉水

安井騎兵

茅野山南

長谷川蒼逸

岩橋弘

小林千代

和氣湖月

松本生

城本生

門野普光

城萍寄池

百合子

増本美篠

西村閑太史

くすのせ

53, 45, 43, 43, 40, 37, 37, 34, 33, 29, 21, 21, 19, 19, 17, 17, 7, 6, 5, 3, 1.

The Mojave - Aug. 1943.

Poston Unit #3. Arizona.
(310-74)

如是我觀

川崎規矩雄

△壘を奪はんとするもの、球をつかんで刺さんとするもの、この生殺の相反するふたつの力の交叉するところに野球の趣味はあるのでせう。そしてそればかりひとり野球の趣味だけでなく、全き人生の意味を表現したものと考へられます。人生の全一の意味は生きていることであります。だが、この生きていることは、生きている力の純を相續だけてなく、殺す力の複雑な経緯によつて、いよく深刻となるのであります。

△古い塚を發掘して得たものや骨董屋から買ひ集めた佛像を、あつらひしげに愛玩する學者たちや骨董屋たちがあります。宗教はほろびても藝術になると誰やらは言つたが、しかしほろびた生命には眞の藝術など生れるものではないでせう。佛像を弄んで居る人々は、つひに佛を生かして得ない人であり、素直に合掌し禮拜する信心深い人々のみが佛像を生ける姿に於てながめる事をゆるされてあるのではないでせうか。

△仲のよい夫婦ほど美しいもの、よい感じを興へるものはあ

りませぬ。

それはすべてから許されて調ふた愛と生命のかたちである
からでありませう。

愛し合ふために、餘他をきついでなくてはならない愛にはど

こかに矛盾と不自然さが隠れて居るやうであります。

戀する事と愛すること、ひとつに融和されつつ、純一に

親んでゆけるお前たちは、本当に恵まれて居る——愛を司
る神はこんな、さやましました。

△

バラックに近い前の電柱にたつた一羽の小鳥がとまっ
て居ます。つれづれ離れて居る小鳥は何となく、いぢらし

い風情があります。

淋しい孤独の姿は、その内面に豊かなものを恵まれて居る様

でもありませんが、外に自分に似たものを探して居る心。そ

れは友を求めてやまない心であります。

友のうち、自己を見出さうとするものにとつて、友とはな
れて生きて居る事は淋しい事でありませう。

△

治け花に水をやる事を忘れて枯らす様な女は子供を本當に

愛して育てる事の出来ない女だ。又治け花を枯らしても平

氣で居られる女は、良人の魂を踏みつけてものんきに唄ふて

居れる女だ。と神経質な若い哲人は誰れに言ふとなくこんな

事を言ひました。

それには勿論周囲の女達にあてつける積りではなかつたが、周囲の女たちは怖しい皮肉を聞かされる様で皆んな顔を見合せて淋しく微笑みました。

『お前たちに當つたのぢやない。若しそんなに聞えたら赦して呉れ、お前達は本當に愛し得る素質をもつて居る、その恵まれた素質を育ててくなくてはならない。活け花に水をかわさないう様に、若い哲人はわびる様に云ひたしました。』



隨筆

一ト歳の想ひ出

増本美篠

熱風に喘ぎ酷暑に慄む真夏の昨年七月十六日夢にも描いた事のないうい沙漠原の転住所に送られて来てから一週年。吾等はこの日を記念すべく去る十七日我等の部落へ殿入り入所者の日をトして記念会を催し過ぐる一歳を追憶し来るべき日に希望を抱くべく吹寄の夕を持つたのであつた。吾等現今の生活は入所前に想像して居た事と幾何程の差異ありや？と立退令発布前の吾々の周章狼狽振りを、そして発令後の意氣消沈振りを回顧して見る時、我知らず微笑を禁じ得ざるものがある。

ポストンには小鳥程ある悪質の蚊群が生棲して移住者を待機
 して居るし鈴蛇は足の踏場のない程棲息して居て一度噛まれ
 たが最後沙漠の土にならなくてけならぬ等々の噂話に可成り
 神経を尖らしたものだ。僕自身立退の前夜は常食の飯に
 最後の惜別をしたものだ。又V L T A M I N A B C D 含有の
 營養劑を藥店と言ふ藥店を片つ端から買ひ渡つた思ひ出を有
 つ者も相當にある事だらう。米や鍮詰を持つて行く事能はず
 と相談所で宣告を受け下らもいとも愛しい米様を衣服類の間
 に忍ばせて来た御仁も相當にあつた事は確である。當時と
 今日を較べて見るをらば転た感慨無量である。
 隣近所に住む永年の知己の米人達は立退令の出した事も知らぬ
 位な朴訥の好人物の様に別離の挨拶に来てくれぬが吾々に取
 つては生別死別の氣持で悲痛なグッバイをしたものである。
 何地で何日また相見る事やらと兒童達の無邪氣に友と談笑し
 て居るのを眺め親たる者の泣くに泣かれぬ苦衷を當めさせら
 れた思ひも未だ眼前に見る様である。緊張した立退人の立退
 準備に賣物に多忙であつた當時と一年後の今日の吾々を比較
 して見る時吾等の心情の変化に自分下ら恥かしと思ふ事の救
 りある事だ。戦時下にある事さ敵國人である事すらも何う
 やすると忘却する程吾々の生活が転住所の人になりつゝある
 否おストン人になりつゝあるのだ。お互に心すべき現象であ
 つて斯るポストン生活に慣れる事は聽て兒童の將來、日系米

市民の前途に暗影を投ずる事になるのではなからうか。吾々は現在如何なる境遇に立つて居るかを認識し児童教育の上に誤らざる行動を執るべき秋ではなからうか。

星霜幾變遷遙かなる人生の山河を越へて 山北凉水

世の中は波の上と同じだと思ふ。萍の身は唯流れく去何処の岸辺に辿るでもなく風のまにまに漂ふ。

人生航路には雨あり風あり風ひだ平和な日も有る代りに又風波荒ぶ戦時もあるのだ。九月月を見る代りに鬱けた月も見なければならぬのである。昨日は山に懸つた物も今日は大海の

波の上に漂ふと言ふ有爲転変之世が人生の習はしである。

人生の行路は山あり河あり幾多の波の道もあるが時には平坦な大道もある。失敗成功浮沈是世の常である。功成つて誇ら

らず失敗すればそれを踏台として一歩前進すべき事と思ふ。

日米戦争が勃発してその餘波を受け吾々在米同胞は斯る沙漠の曠野に收容せられ不自然なる生活をして暮すのもこれ又前世の約束事だらう。

吾々一部落に三百人と言ふ大家族が一團となつて共に樂み共に学び共に歌ひ共に考へ共に悲む其処に僕等の修養過程がある。お互は今後幾年の苦難重疊が続く事であらうとも隱忍自重して榮枯波瀾に満ちた此運命を打開し強き信念のもとに此

艱難を押し切り勇往邁進不撓不屈の精神で一路自己の目標に
進むべきだと思ふ。

星の降る夜

安井騎兵

星の降るやうな一夜、冷めたい石塊に腰かけて空を仰いで
涙くんだ。

何故人間に生れたのでせう。泣いて泣いて泣き抜いて、墓に
なり得た人々が、羨しいと思つた。

ほんとに怨みは盡きぬもの、ほんとに涙も盡きぬもの、涙ぐみ、
しまひに泣き抜いて寝る我よ。

生きるつらさは同じこと。昔も今も凡夫故に。

凡俗は唯だ身辺の私に囚はれて、五尺の小天地に樂しく終る。
内に「或ものを信ずる力」が深く強くなれば成る程、人は一應孤
独となる。

交際を断ち言舌を忌み、常に何ものかを考へる様になる。

そして世智亭き人生に尖つた神経は、次第に痲痺し果つて、

人間の外相が全く一変する。

やがては大膽不敵に行動する。

萬事を唯、朗らかに自信を持つて裁断するに至る。宗教人の
面目は、茲に初めて、塵世の上に躍進する



カリフォルニア印象記

「移民の牧歌」

茅野山南

今にして想へば、それは夏の日の午睡の夢なりしが如し
寒流咽ぶカリフォルニアの岸辺にて

詩人西條八十のカリフォルニア印象記「移民の牧歌」の哀愁の詩
の一節は私の胸にひびく。私はアメリカに来て四年有余そし
て多勢の人と一緒にポストンに來た。そして一年。けれど
も胸の中には加州の想出「移民の牧歌」がある。

初めて來つたアメリカ航路の船で私は歐洲通ひの船と全然異
つた空気を感じた。彼方では繪具や書物の匂ひを感じたが此
処では来るなり直ぐ鉄やの匂ひが感ぜられた。午後になる
と上の甲板でレスリングの風間君や太田君が眞剣に練習して
居た。外人客が日本のレスリングの進歩に感心したやうな怯
えたやうな眼をして屈竟な二世青年達にまざつて取巻いて見
物して居た。またその見物の中に居た和服と洋装の娘。
和服の方は三歳の時まで桑港で育ち、それから母につれられて
故郷の廣島縣へ戻つて居た。母が死んで孤子になつたので十
六年ぶりに父に逢ひに行くのだと語つた。

幼い時に別れてもう記憶に無い父親。それが怖いらしい人が
優しい人の想像もつかない。其人だけを頼りに唯一人海を越
へて知らない異國へ行く。この省目美しい娘の物語りにはキ
ツプリーングの小説にでも在りさうな牧歌的哀愁が籠つて居た。
胸にもつたことだつた。それはこの眉目美しい娘の物語りと
同じ様に私も二つ三つの時まで桑港に育ち二十年ぶりでもう
記憶に無い父親。その人だけを頼りに唯一人海を越へて知らな
い異國へ行く。身だつたからである。
洋装の娘はこれと反対に、ワカンセルズに生れて、ずっとそこ
で育つた。そして二年間日本語を覚えるため、やはり故國の田
舎の町へ行つて来たのだつた。彼女が或晩デツキで私にこん
な小さい日の想ひ出話をした。
「学校もずつと白人と一緒にしたし、教会もおんなじでしたわ
ら、特別に自分が日本人だからと思はせられる様なことはあり
ませんでした。だが或日女の牧師さんがみんなを連れてピク
ニックに行つたことがありました。どこだつたかもう覚えて
居ません。が見晴らしのいい山の上で、きれいな湖水がありまし
た。そこで皆が泳ぐことになつたのです。私も嬉しくて服を脱
いで入らうとすると、先生が急に私を押し止めました。ほのか
な子供達が嬉しうに泳いで居るのに、何故私だけいけな
いのか、私は悲しくなつて、その訳を先生に訊きました。優
しい先生は

何も仰有らず黙つて自分も悲しさうな顔をしていらつしやりました。

日本人や支那人が白人と一緒に水に入つてはいけなうといふ掟のあることを私が知つたのはそれから後、かなり大きくなつてからのことでした。たゞその日は何もわからず悲しかつた。そしてそのことが今でも忘れられず胸に残つて居ます。

かうした船内の空氣が一つ／＼私に今まで考へもしなかつたアメリカ移民への関心を深めさせた。

或日の午後三等の食堂で移民の乗客たちの座談会が催される

と事務長からの案内があつて早速出掛けて見た。時化の日の

ほの暗い船底のサコンに集つた老若男女の客四十名ばかり。

オリウランド在住の老実業家とサンビード口の年の若い開教

使とが二人司会者で会はずでに進行中であつた。久しぶりに

故國を訪ねた色々な人が立つて交々所感を語つて居た。往來

の聲音が騒々しくて眠れなかつたといふ話。自転車が多いので

今更の様に驚いたといふ話。中には何故日本ではボーイフレンド

にも持つては悪いんでせうと疑問を發する二世嬢も居た。

一番印象深かつたのは紀州熊野の産で今はサンビード口港で

漁業をやつて居るといふ白鬚の老人の話だつた。

「わしら老いた一世はみんな血の汗を流して今日まで働いて

来た。炎天で果菜を作つたり、荒い海に出たりしてやつとこさ

貯めた金を持たせて作たちを日本へ教育にやるだ、どうして
居るかと見に行つて見れば、學問もせず、遊びで八分通り
もろくでなしになつてしまつて居る。
こゝれをどうすればいいのだ、わしら移民は悲しいことに可愛
い子供を膝下で教育することが出来ない。置いておけば白人
根性になつてしまふ。見ないで日本を輕蔑し日本人を毛嫌ひす
る様になる。さうかといつて親孝行や祖先崇拜の美德を覚え
させ日本精神を吹き込ました氣儘さと言葉が通じない弱味から
世界で放し飼ひになつた氣儘さと言葉が通じない弱味から
くに勉強もせず、ブル／＼に金を使ふ親の目が遠いのを倅ひに道
樂者になつてしまふ。わしら第一世には老後の安心といふも
のは絶對にないのだ。
戸外の労働生活で顔に深い皺を一ぱい疊みこんだその老人
の慨嘆は言々哀切を極めて居た。
息子がかりぢやない、困るのは娘もおんなじだ。二世の娘に
は日本人の処へ嫁に行くより、白人の玩具になりたがるのが
多い。それに嫁に行かうとしても、白人の玩具になりたがるのが
も居なければ居ても、その教が足りない。
それに呼應してかう叫んだ商人風の人も居た。
司會者の一人である老實業家は在米三十余年で六十余歳今
度の最後の骨を埋めに行くのだと称して居たが、私に上海事
變の当時の苦心を話して聴かせた。

アメリカには現在約十七万の邦人移民が居る。その中アメリカ生れの第二世の数は七万、そして満二十歳以上で参政権を持ち、米移民が絶対不可能となつて以来、此ら在米邦人の生活は忘れられがちである。排日土地法の巨頭マクナチ氏が當て故新渡戸稲造博士に言つたと傳へられる言葉のやうに、米國移民のことは日本人でさへ忘れかけて居る。

今日日本の民衆はその眼を北方の大陸南方の島嶼へ向けることが忙がしいのだ。しかも尚、アメリカには孤城を支へた同胞が必死になつて足掻きながら生きて居るのだ。

羅府へ上陸した数日後、私はレドントビーチの辺までドラッグして邦人たちと語つて見た。この沿岸到處に同胞の住居は點在して居た。美しいバラやカーネーションの温室を沢山持つて居る花園の主人にも会つた。家族だけでやつて居る小さい野菜園主の老翁にも会つた。寒い夕ぐれ淋しい畑で黙々として苗を揃へて居る中年男の群にも会つた。その男たちは寫眞を揃らうとすると、ノーカンキューと言つて断つた。強いて撮らうとしたら怒つて嘔鳴つた。若き日の海外雄飛の夢破れた雇はれ人の今の姿を故國の誰人にも見せたくないのであらう。

一九二〇年の土地法實施以來日本人は加州で新に土地を買ふことも借りることも出来なくなつた。だが倖ひなことに彼等の第二世は漸次に成人になりつゝある。市民権を持つ株主

が半数以上居る会社なら現在のところでは土地を新に購入することが出来るのである。そうして満二十歳に達した第二世の若者にその立派な市民権があるのだ。それから日本から労働者を呼ぶべくともこれ成長した第二世を以て補ふことが出来る。それで不足なら外にメキシコ人もフィリピン人も居る。この日会った移民の人達はもう移民法や土地法に對する女々しい嘆きは繰返して居なかつた。唯憂へて居るのは彼等の生んだ第二世の若者たちが思ふやうに育つて行かないことだ。即ち第二世たちは教育を授かつたインテリになつてしまつて大多數は今日近第一世が苦闘し開発した田園の仕事の後継ぎしようとは希望しないのである。

それから数日後ロサンゼルス¹の果菜市場を訪ねた折にもこれと全く同様の嘆きを聞いた。

アメリカを知らない日本人がロサンゼルスへ行つて邦人経営の果菜市場を見たら誰でも喫驚する。教にして五百軒を超えろ装麗なマーケットが三千近い邦人の就業員に依てこの町の中心から近郊一帯の顧客を独占して居る。

私はある深夜三ブランクの巨大な廣さを持つその中央市場を參觀して忙しく往來する邦人の群集。巨大な貨物自動車荷車の汚染を働きを見て自分がアメリカに居るかと疑つた程だ。荷車もその組合の長老たちは悠然としていふのである。百姓が旺んになり市場業が出来小賣まで日本人になつた以上

アメリカにどんな法律が出来たつても、吾々を追拂ふことは出来ませんや。だが恐いことは後継者がしつかりして居てくれないうことです。何んといつても我々第一世は三千の従業員の中で、ざつと一割しきや残つて居ません。それに第二世たちの心細いつて言つたら日本の製品をんでシヤツ一枚買はないんですからなあ。

彼等の話によると邦人の果菜業者の成勳するは、その陳列の巧妙な点にあるのだといふ。紅緑紫黄の果物や新鮮な野菜を、いかにも味覚を、るやう美術的に、且つ清潔に展列する指先の技術だ。ところが、死んだ第一世の店を継ぐ倅たち、自分でもやるのを嫌つて、ノキミツ人やフイリツピン人を雇つてやらせる。それで自然客も減れば、折角の技術の妙も、外國人たちに盗まれ、模倣される様になりつゝあるといふのだ。

忘れられぬのは、中部カリフォルニア、サンオーキン平原に在る植民地や、過した夏の一夜だ。一九〇六年このかた、苦闘に苦闘を重ねて、この砂漠を見事な農村に開拓した尊敬すべき、パイオニアたち、私が私を困んで居た。そして数々の追憶話を聴かせてくれた。移民地風景の物珍しさ、迎へられた家は新築され、たばかりの瀟洒なバンカ、風の邸宅、サコンに美しい壁面もあれば豪華なピアノも置いてある。しかもそのモダンな照明の下に寄り集まつた人達といへば、淡紙色の皮膚と過度の筋肉労働に皺だらけになつた顔、日本の^{（田舎）}旗迎に見る農夫そのまゝだ。

唯話の中に英語がちよい／＼混るのと燻す煙草が銚子煙管に刻み煙草でなく両切のチエスタールファイルだつたりラフキイストラウだつたりするの違ひだ。

つまり移民地の人々はアメリカの文化風俗の中を素通りもて紀州や九州や越後の田園からこの田園に直行してしまつた人々なのだ。私はそこにも道具立てが人物に割はなない微笑せずには居られな一ものを感した。だがこの人たちのアメリカ化をなない日本の生一本の努力がアルメニア人フランス人ドイツ人がみんな辛を焼いて逃げ出したこの荒無地の開墾を見事成就させたのだつた。

長老達の話は開墾当時の苦心談——僅十二三人の日本人が終日力を協せて葡萄苗を植へつけるさうして翌朝行つて見ると耕した処は一夜で元の砂原に還つてもうつて多数の苗の行方さへ判らない。さうした話から始まつてピクケユア、ブライドとは今は時代のユーマラスな話も出た。ピクケユア、ブライドとは今は禁止されたが一時流行を極めた寫真結婚の花嫁だ。彼女等が桑港に上陸しホテルに入ると商賣に技目のない米人の裁縫師達が殺到する。ところでこちらは日本の片田舎に生れて女の洋服など見たこともない花嫁。それから醸された数々の喜劇やまた寫真で定めた花嫁を準頭に迎へに出たその良人たちが相手を取り違へて結果それ／＼が想ひがけない花嫁を娶つた珍談など續出して際限がなかつた。

私が一夜泊めて貰ふことになつたこの家の幼兒は自分が贈つた日本土産の絵本に懐いて私の膝で眠つてしまつた。オメくしく紅茶を運んでくるその母親この人も當つてはそのビクチユアプライドの一人ではなかつたのだらうが。

長老たちのトピクは寫眞結婚から延いて第二世の結婚難問題へと赴いた。加州とオレゴン州に於て邦人と白人との結婚が禁止されてから若い男女の二世は其配偶者を六張邦人第二世の間から選ばねばならぬ。ところでは第二世の男女は殆ど年齢が平均して居るのでさしづめ困るのび二世娘だ。

「うちの息子とあんたの処の娘さんと一緒に出来んもんか」さう出来るといふのぢやがどうも此道だけは規則ではないかん

もんでねし。

そんな話も其夜長老たちの間に交されて居た。それ程結婚を痛切に感ぜながら此移民地の人たちは佛教徒の邦人との結婚は絶対に拒否する口吻を洩して居た。また此人たちの話を通じて私は今日でも日本の地方人の間に多少残つて居る差別感が米國西海岸の移民の間に行はれて居るのを知つてその執拗なのに吃驚した。

藝術乃至娛樂といつた様なものはこの人々には何の興味も與へないらしいかつた。話が途切れると古老たちは故國の政局に關する質問をうるさい程私に浴せた。さう言ふ方面には交渉の薄い私だけにこれには弱らされた。殊に二、三六事件や日支

事変に關しては流言蜚語とわかつて居る消息でもない、から残らず聴かせてくれと強請された。

日本の或有名な漫談家が西海岸の移民地を興行して廻つたことがある。私は今度来て見てその漫談家の評判が到る所で悪いのに驚いたが少し滞在して居て原因がわかつた。この移民地帯には漫談のユーモアなど味ふ氣分の人には殆ど居ないものである。またそれだけ祖國の一々の事件が彼等の身邊に微妙な影響を授けるのである。

その翌朝私は起き出て見て見違ひす農園の天際まで続く豊かな緑に吃驚した。中部カリフォルニアの産業の第一位に在るレーズン葡萄のウムソントラウイ、アリカンテあらゆる種類が栽培され遠く東部やメキシコ迄邦人の手によつて送られて居るのだ。街道には大きな貨物自動車並びそれを越えて西南の空にシエラネバダ山脈が朝の太陽を受けて紫色に輝いて居た。農園には紅雀の群が灰のやうに舞つて居た。

まだ朝早いのにパッキング、シエードには廿人ばかりの少女が集まつて杏の実を袋へ詰めて居た。みんな第二世で粗末ながら身体に合つた可愛い服を着て居る。

村のホールで一週一回日本語を教へて居ると聞いたのでゆつくり話し掛けて見たが微笑するだけで一人も答へない英語で喋つたら初めてやつと返事をした。

私はこの祖國を知らない少女たちの腦裡に日本の姿がどん



なに描かれて居るだらうかと考へながら一人一人小さい彼等の
の掌と握手した。そしてこの灰色の未来に持たぬ邦人第二
世の少年少女たちに寂しいサヨナラをした。(終り)

詩

友 蒼逸

一

彌生の空に 浮かれ出て
緑の蔭に 暖けは
赤き血潮は 尚ほ燃へて
噫 奈何にせん 我が想ひ

二

悲雨 慘風に 世路 難く
砂漠の中に さ迷へど
友と語れば オアシスに
泉を掬みて 飲む如し

三

幸運 兎角 恵まれず
享樂 綏て 夢のごと
斯くて何時まで あり得なん
逢ふは別れの 始めとか

17

人なき森に 月清く
山は霞みて 遙かなり
河の流れを 唯一人
眺めて暮す 寂しさよ
(四月四日)

過去の線路 岩橋弘

加州を出てから約一年
或曰 夏の暑い日だつた
萬物が暑さに喘いで居る八月の
日 黒い列車は 長い錆つ
いた線路に 何物かを求め
う 走りついで居た。
夜も 晝も 休みなく走りつ
けた 小さい毛唐の子が
珍らしい顔をして 手を振

つて居た様子が見え、今尚眼に
 映る長い列車だった。つた冷めたい砂埃も苦にならなく
 古い埃にまみれた列車だった。屋といふより紙張りといつた
 た唯日本人許りに與へられ、方がいふ所々の紙も破れて居
 た黒い長い箱の連りだつた。鈍い方を通り降つた雨の破れ
 音を立てて、其箱の連りだつた。鈍い方を通り降つた雨の破れ
 い坂を登つて居たのも覚えて、外には雨が絶え間なく
 居る同胞が、我々日本人が、我々日本人が、淋しい誰か外に
 々同胞が、家を離れ、十年住みなれ、降つて居た外には雨が絶え間なく
 し、家を離れ、十年住みなれ、降つて居た外には雨が絶え間なく
 産を打ち棄て、未だ時の財、居ないのか、雨に打たれて、板
 口惜しさが、今尚事新らし、別、何にも考へず、腰を下した、つ
 く感じられる、悲しき箱の、箱は重かつたのか、腰を下した、つ
 連りだつた、親友と別れ、振つて見たが、五尺の小男を
 愛人とも別れ、その心の中に、淋しさ、ふり落すことは出来なかつた
 何ともやるせない、淋しさ、別、戦争の話にも、放送にも興
 来、幾日の胸に漂つて居た、味、が、湯、な、かつた、同じ様な放
 とも頻々枕を抱きて、祖國の二送、が、毎、日、く、縹、り、返、さ、れ、て、僅、か、五
 黒い紙張りの家にも馴れて、し、ケ、年、間、の、米、國、生、活、の、想、ひ、出、が

走馬燈の如く 腦裏を廻る

都々逸 小林千代

主は書見でわしや針仕事
すぎし昔を夢に見る

主は配所でわしや籠の鳥
姉の娘は息子二人は牢の女
胸の病は四月より
胸の病で床のなか

蜀山人片話(三)

和氣生

蜀山人は將軍家齊公の御微行の時、扈從して御興を添へて
居たのである。或時將軍は臨田川の鴨狩に御微行遊ばされた。
下度大雨の直後、泥土の道を杵川の辺に御急ぎにて差し懸つた。
時に前も御徒士が足を滑らし大地を打つて仰反けに倒れて泥
水が將軍の野袴をしたゝひに汚した。御顔に至極、陰に御氣
配を見た山人は腰の矢立を取り出して、一首認めて將軍に捧げ
た。家齊公御覧になりて破顔一笑、御咎めもなくお過ぎになつ
た。其歌け
雨の跡、寧ろ杵川御成道、御徒士どつさり尻餅を搦く。
臨田川の河畔も彼處此處と御機嫌を氣てお小人は渙つて
見ても鴨は見附からず、御不興のまゝ、梅若塚の辺りに来た。梅若
塚の由未は昔京の吉田少將の一子、梅若が比叡山にて修業せし
が十二歳の時、惡漢に誘拐されて東國に連れられ、臨田の河畔に

て死した。里人此を憐んで塚を建つ。其父子の跡を慕ふて梅
 若塚に於て大念佛会を催す由。折柄一群の鴨を見附けた。家
 母寺はこれと計に矢を束へては射り束へては射り矢数をし
 齊公はこれと計に矢を束へては射り束へては射り矢数をし
 た。いかに使ふたが獲物はなかつた。將軍の放つた矢はお小人が
 数を揃へて拾収せねばならぬこと。彼方此方と探し廻つて
 居るが全部見附けらな。折柄黄昏近くなりて將軍の御機嫌
 頗る斜なる気配を見てとつた。山人は例の一首を認めた。
 漸く御機嫌を繕ふて飯館に馮かれて不機嫌や憂鬱を歌で詠
 市井の人々の延喜や迷信に馮かれて不機嫌や憂鬱を歌で詠

み更へした事などは挙げおれな。程あつた事を記憶する。其一
 二の例を挙ぐれば或人山人の処に来て、門松に癡癡者が来て引
 き掛りたりとて正月の元日に斯の様な事が出来たのは俺の運
 命もこれぞ木になつたと主人が大変に鬱が込んでいます御助
 を頼むといふ。山人は直に筆を採つて一首認めて渡した。太田
 先生に詠み直して貰つた。これで大丈夫だと言ふて主人は大変
 喜んだ。

門松に凭れて泡を吹くの神これぞまことの辨財天かん。

又我家の主人其子の誕生日のお祝に近くの明神様に参詣せん
 とする時にその子が一個の包を拾ふて来た。何の気なしに開
 けて見ると袈裟と衣と珠数が出て来た。主人は延喜屋の事とて

此子の短命のお知らせだと大變鬱き込んだ、これを聞いて山人は詠み直してやつた

今朝(装束)拾ふ頃も(衣)霜月十五日、子供の歳は珠教の教ほど、こ北にてその主人軽き心持ちになりたとの事、斯くの如く其相手人を視てこれに適する様に常に即吟をするのである。(續く)



コロラド河夜曲

松本

一
沙漠の果てに日は落ちて
コロラド河の水悠るく
星光^{カガ}淡く瞬きて
夜は静かに更けてゆく

或手紙

城本生

二
そよ風柳を拂^{ハラフ}り
草葉に囁く虫の音に
故郷戀しさ歌の曲
旅寢の夢も圓がなり
三
弓張月の傾きて
昔ながらの運は
水くはに河に明きて
浮城の白鳥下りゆく

A兄よ

親しく同棲して居た春江さん、星霜の如く捨て、終つて君が季子さんと結婚してから最早や八年の星霜が流れ、終つた

ね。君に言はせると春江さんは唯路傍の石に過ぎないと言ふ
 かも分らぬ。斯くとも路傍の行違ひにも似た淡い感情の戀愛
 だつたと言ふかも知らぬ。而し、それでは春江さんは余りに
 も可愛相だよ。今になつて君は春江さんの氣持も亦君自身の
 氣持もはつきりと解つて来たと思ふ。だが、時期はをいぬ。
 又、戀愛は人間の感情の御都合主義と君は言ふかも知らぬ。
 戀愛を御都合主義に貫徹さす君の氣持は余りにも残酷だよ。
 今になつて春江さんと結婚して居れば良かったなどと云ふ君
 の氣持には同情を寄せる價值がないね。余り虫が良すぎるよ。
 世間ではそう云ふ例が沢山あるかも知らぬ。而し君の場合
 又別だと思ふね。あの時はつまり云へば君が春江さんを
 捨てた時——君が季子さんと結婚して新婚の夢圓るむ時——
 春江さんは泣いて俺の処へ訴へて来たよ。あの時の君の動作
 は実に残酷だつたね。俺もアツケにとられた位いたつたよ。何
 しろ不意の出来事だつたからね——俺の頭にもこれと云ふ善
 後策も浮かばず春江さんを出來得る限り慰め君の事を諦
 めて終ふ様にと勧めたけど、やはり春江さんは可弱い憐れな
 一個の女性にしか過ぎずどうしても君の事を諦め切れなかつ
 たらしい。悶へ苦んで居たよ。さめぐと泣いて居た。こうし
 た出来事に直面した場合戀に悩める処女が如何に可憐である
 かわかり、反面戀がら生ずるこうした悲劇がこの世に於て如
 何に醜惡であるかを認めたね。あの場合春江さんが諦め切れ

なはいのは人間共通の感情だよ。分るだらう君。こんな例は又世間に多くあることだが。春江さんの場合。又俺と君との友情関係を思つた時。云ふに云はれぬ淋しさ。人生に於ける幻滅の悲哀をつく。感じたね。唯俺は春江さんに憐憫の情を寄せて居たに過ぎず。それ以上の好意的何物も持つ事が出来なかつた。過ぎたる異性への同情は往々にして愛情と變つて行くものだ。しかし、君があつた態度にも拘らず俺はやはり君に一つの淡い期待と信頼を持つて居た。そうしたものゝが俺の心の一隅に蟄居すればこそ俺はどうしても春江さんには同情以上のものを持つ事が出来なかつた。又そう考へても俺の心に抑へ難い春江さんに対する欲望が恰かも雷雨前の入道雲の如くムウくと起き上つて来た。俺は飽く迄も自制した。君と春江さんとの同棲生活は余り長くもなかつたがあれでも一年位は続いたね。その間は君は無上の幸福感に打たれて居た。あの延長線の交りには結婚より外になつた筈だ。俺が正式の結婚を勧めた事は君もまだ知つて居るだらう。今更君を詰問したつて何にもならないう。春江さんの両親が君達の結婚に反対したのもその一つだつた。君に決断力のなかつたのもその一つだつた。しかし、今思ふ時。後者の理由が現在君を悲しき境遇に墮し入れる大部分の原因となつて居るね。勘くとも後者の理由に支配されて居る。君は自分の御都合の良し理由を

考へて居るかも知分らぬが然し俺はそうだと考へて居るね。何
 につけ君は決断力のない男だつた。季子さんと結婚したのも
 武一部の方面から推察すれば君に決断力が無かつたからだ。
 兎に角結婚は物質的に左右されるものでないからね。愛情
 に結ばれてこそ眞の人生の行路を辿り得られるものだ。君達
 のために俺は相当以上犬馬の勞を取つた筈だ。何時か君は
 春江さんが妊娠したと云つて心配し飯も口く喰はなかつた
 事があつたね。實際そうでなかつた事は時日の流れが証明し
 てくれたが。あの時春江さんが妊娠して居たなら君はもつと
 く幸福な家庭生活が出来て居たと思ふよ。あの時君は東港の
 方へでも逃げようかと云つて俺に相談したね。君が本当に実
 行すれば俺は君達の逃避行に全面的に支持するつもりで居た。
 俺にも一つの成算があつたので――あの時君は一週間程姿を
 見せなかつたね。俺は本当に高飛びしたものと思つて居た。
 が實際はそうでなかつたね。同棲と結婚の意味がどの位違ふ
 のか知らぬが君達の場合そうした手段は必要でなかつたん
 ぢやないか結婚を春江さんに約し下ら君の無気力に春江さん
 んをに虐めさせた事だ。どんなに離れたい勤直を従士の如く
 春江さんは君が好きであつた。側を離れたい勤直を従士の如く
 それから幾週間か流れて――君はどうか氣が狂つたのか如
 何なる成算を立てたのか。君は今の季子さんと結婚する事と

癸亥したぬ。青天の霹靂であつた。驚天動地の氣がした。君
もやはり凡夫であつたのだ。俺に云はせるとぬ——春江さんを
どうすると云ふ俺の質問に君は唯、清まないと洩した丈だ。そ
れで清めば世の中には兎角何事も起きないさ。天網恢々疎に
して洩さず位の事は君も知つて居たいらう。俺はあの時君に
對して何も云ひ得なかつた。而し密に君があつた態度に對
しては何が及動が来るものと思つて居た。期待して居たので
はなかつた。又君が一身上に不幸な慘事を到來を願つて居た
のでもなかつた。だがそう云ふ様を不吉な予感に終始俺の念
頭から去らなかつた。然し俺の予感的中した。季子さんの
精神的異常——癸亥——それ水が漸次悪化しつゝある季子さん
の現状——二人の子の父である君——病に苦む季子さん——果して
君は何と思ふ？君は今更の様にあの時俺に云つた清まないと
の言葉の意味が明瞭に分つて来たと思ふ。可愛親な君ではあ
るが如何にもし難い。又君は毎日世の無常に泣いて居るかも
知れぬ。而しそれは當然の報酬として君が甘受せねばならぬ。
人生に於ける一つの極端だよ。今になつて春江さんの事を思
ひ出すのは春江さんに對する冒瀆だ。君が結婚してから春江
さんにも幾度か会つた。而し春江さんは何も云はなかつたよ。
俺が云ひ出せば直ぐに話題を変へ。淋しい微笑に何時も君
との問題を打消して居た。風実顔に少し許りの面やつれは春
江さんの女性美を一蹴と美しくして居た。何も云はなかつた処

に春江さんの諦めよさと強い意志と
 の捨て難い思慕の情とがあつた記だ。俺には春江さんの氣持
 がよく分つて居た。何も云はないうちに春江さんは君よりも俺
 よりも賢かつた記だ。それから春江さんにも永い間違へな
 かつた。又その頃から俺がビデネスを始めたのもその理由の一
 つたのもその一つ理由だつた。そうした記の分らぬ様を白が
 續いて居た或日の朝 春江さんからの結婚案内状が投函され
 た。一時は疑つて見たがやはり春江さんからの結婚案内状が投函され
 様な氣持に打たれたが春江さんが結婚するのは何等異様な出
 来事ではなかつた。俺は春江さんの結婚について色んな角度
 から考へて見た。而し春江さんが圓滿に結婚し 幸福な家庭
 生活を送ることが出来れば君との関係も最早や忘却して終
 ふだらうし 又俺が君達に盡した努力(春江さんめみ)に對して終
 と云ひたい俺の氣持だ。不成功に對する責任の一半も露消し
 て終ふ記だつたからね。嬉しい氣持になつた。
 俺は春江さんの晴れの結婚式に出席しようか すまいかと大
 分思案した。結局は出席してしまつたと思つた。昔の古傷に
 逢巡して居る春江さんではないかと云ふ俺の考は否定されて
 終つた。春江さんは喜んで俺を式場に迎へてくれた。晴着を着
 飾つた春江さんにはやけりあの當時のまゝの春江さんの容姿だ
 った。あの時から身についたのか林しい春江さんの微笑はこ

の喜ばしい結婚の式場に臨んでもやはり淋しい微笑だったよ。
幾分なりと君との関係による苛責の念が春江さんの心の一隅にあつたからだ。機会があれば今すぐにでも飛び出して終ひたい様を一つの心の黒点を抑へに抑へて結婚式に臨んだ春江さんだった。そして――
新婚旅行も終へ春の駘賜を思はせる様な長閑な春江さん達の新婚の夢が幾月となく円満に続いて居た。だが春江さんにはどこまでも可愛相な女だったよ。信頼する夫――その春江さんの夫は或種の不頼漢だった。結婚して三ヶ月もしてから春江さんの顔に憂悶の微候が時々見られた。一錠と淋しいうにね。俺はその原因を問ふて見た。しかし春江さんは何も訴へて呉れなかつた。聞けば春江さんはこの世の地獄の生活を送つて居たのだつた。その頃春江さんの天には別な女が居た。第二号夫人とでも云ふ様な種類の――又それ許りではなかつた。その頃から酒を飲み出した夫は酔へば喧嘩する口論は絶間なく世に云ふナラズ者の夫であつた。そんな生活が春江さんの上には約一年許り続いたよ。その間春江さんは放縦な夫に対して飽く迄も優しく淑かに温順に仕へて来た訳だ。大抵の女だつたら自分の方から逃げ出す処だね。而し昔の轍を踏みたくなひ強い春江さんの意志は奔放な夫に対する優しい態度となつて現れ除々に一年も経つた頃から春江さんの夫は覺醒したとして来た。

省略するとして。そうした気儘な男は墮落するのも早い。が
 反面改めざるものも亦早いと云ふ事を知つたのだよ。改心の動
 機となつた重なる原因はやはり春江さんの妊娠に依つたものだ
 と思つて居る。それから春江さんの出産、女の子だつたよ。
 春美と命名されたよ。春江さんに似て可愛らしく美しい女
 の子だ。何時か春江さん達が買ひ立ての眞新らしい自動車に
 乗つて遊びに来たよ。若い美しい立派な母親だ。その時始
 めて昔の懺悔話が出たが、自分の努力を主張することなく
 全てを夫の爲めに感謝して居たよ。思へば波瀾重畳として多
 岐多難な春江さんの青春の行路ではあつたが、それを上平に
 克服した春江さんはやはり賢かつたのだつた。君との關係は
 考へて見れば悪い夢であつた。春江さんも充分それを認識し
 て居た。そうした種類の理由に依つて平凡な女はやはり墮落の
 一途を辿るものだ。而も春江さんは流れる急流に反逆の氣持
 を抱き、飽く迄も更正の一途を辿つて来た。そこに春江さん
 の偉さ。或は賢さがあると思ふね。君に賜られ、夫に虐けら
 れ。而して天は春江さんを見捨てなかつた。一陽来福と云ふ処
 だね。俺は永い事君のことを批難した。にもかゝり君達の現状に
 同情して居る一人でもある。翻歸した昔の氣持も嫌惡の情も
 時の流れに従ふと共に。君たちの不幸事について最早同情
 の念と變り、俺が君達に抱く可愛相なと云ふ念は普通の人間
 の誰もが抱くものと何等變りないさ。君も二人の幼兒の親だ

そうだね。御苦勞な事だらう。季子さんの病症如何？
の養生だ。季子さんを大切にし給へ。
(終り) 片角

假名について

門野普光

次に申上げたい事は日本に現存して居る假名の排列法に二つの種類の有ることでありす。

一つは片假名五十音で一つは平假名いろはであります。

先づ最初に片假名が、いつ頃日本に出来たかといふ問題であります。平直に云ふならば此五十音といふものは日本の産物でありません。西暦紀元前数世紀前よりある印度のサンス

クリット(梵語)は體にこの五十音の排列を明かに示して居ります。

徳川時代の神道學者が盛んに五十音は神代よりありしもので特に創造的に神代文字なるものを紹介して居ります。

然し乍らこれは唯其人々がこの五十音が如何なる系統を以て

日本に傳來したかといふ事を深く考へる事もなく空想の意見を述べたものであります。

私は元よりこの印度傳來説を信するものであります。權威

ある人々の意見も體に五十音は日本に佛教傳來したる後であ

るといふ事です。或は又この印度の語學が日本に文字でなく

音として早くから傳はつて居たといふ説もあり或はそうかも

知れなまいと思はれるのであります。それは印度より佛教勃興

以前平く西蔵に五十音が傳はりそれより北して蒙古に入り後
 世^釋鞏^鞏藏^藏といはれた地方を経てそれより古代の新羅國を經

て日本に傳はつたといふことである。

尤もこれに就て慥かな證據は新羅まではあがつて居るらしい
 が日本の證據がない。私の考へる所ではこれが出雲族に傳は
 つたものではない。申す迄もなく出雲族は日本本土の大部
 分を従へて居たとも思はれずし。又例の素盞鳴尊の「八雲立
 つの歌も甚だこの語原説になつて居ると思はれず。

然る事安朝の初頃より日本に於て悉曇の研究が始まり其大家と
 して僧空海(弘法大師)僧最澄(傳教大師)僧圓仁(慈覺大師)僧

圖珍(智證大師)

これ等の人々が入唐して盛んに悉曇を研究し

て日本に傳へたのであります。これと同時にどうも平安朝の
 初頃から日本の音韻の字が完成せられたやうに思はれます。
 されば愚考ではありますがこの五十音もこの時代の渡来でこ
 れも日本の現代の五十音の片假名に直されたものではあるまい
 か。一が掉し狹んで申しますが假名といふことは漢字で假
 の名と書きす。これは略した意味でありませう。片假名とい
 ふことは文字の偏或は旁を片方だけ書いた假名といふ事で
 あります。例へばアは阿の偏下アでありイは伊の偏イで
 あります。ウは宇の冠であります。このやうに出来上つたのが片
 假名でありまして決して日本固有のものでなく印度の音を支
 那の文字の片一方に直し表はしたものが片假名であります。

こゝにいふ風に申せばお解りになつたでせう。

次に平假名即ちいふはであります。これは古来の傳説によ
り、僧空海(弘法大師)の作といふことになつて居りました。古
き木版等には大師の筆蹟としていろは四十八文字の印刷せら
れ、居るものを種々見受けますが、然しこれはどうも空海の
作とは信ずることが出来ません。其理由を説明致しますと第
一、いろはは意味のあるものであつて五十音の様に音の順序に
由つて排列されて居るものでなく、一つの歌であります。即ち
今様といふ歌で七五七五を四つ重ねたものであります。一層
これをわかるやうに申せば

色は白へど

散りぬるを

わが世たれぞ

つねならむ

有爲の奥山

今日こえて

浅き夢みこ

ゑひもせず

これは漢文に翻訳されて居る釋迦の四句の偈文を非常に巧妙
に完全無缺に今様の形で言ひ表したものであります。

原文漢訳は

諸行無常

是生滅法

生滅滅已

寂滅爲樂

であります。このいろは歌こそは深刻な偈文の意味を遺憾
なく四十八音で表した許りでなく、その発音の順序といひ歌ふ
調子といひ實に見事なあざやかな今様の形をとつて四十八音

が排列せられて居るといふ事は日本最高の文学でこれに勝るものはないでせう。

諸君が如何に発音の順序から見ても正しいといへ五音が其音調がゴツ／＼して居るのに比べていろは歌が円滑流暢に排列せられて居ることを知ることも出来ませう。

これを以てもこのいろは歌の作者が常人でないことに考へ至るのであります。処でこのいろは歌は前にもいひました通り

今様の歌歌を備へて居ります。今様は弘法大師の時代にあつたものかと申しますと、どうも現在ある文献によればなかつ

たらしい。知り得る範圍に於て白河院鳥羽院の頃に今様が専ら盛んに世に用ゐられたことは明かであります。

それに就て私の考へますことは萬葉集は長歌に於て五七調であります。古今集になりまして七五調になつて居ります。それ

れから古今集以後に於て既々長歌が世の中から忘れられていつた事は代々の撰集に於て明かであります。

それであるから古今集の時代即ち延喜の頃から次第に七五調の今様が世に出たのでけあるまいか。其時代に於て名の知れ

ない大家がこのいろは歌を作つたのでけあるまいか。

或人の説によれば愚信僧都の作ではないかともいはれて居ります。この人は今様調を沢山繰返して所謂和讃なるものを多く作つた人でありませう。この様な次第でいろはも亦作者不明

であります。

然し下ら現今まで我日本文化の根底をなして居た片假名五十音及び平假名が宗教家に由て作られたといふことは非常に意味のあることと思はれます。
いろはもアイウエオも共に支那の漢字を部分或は全部を借りて日本の當時ありし音を表現したものであります。

(未完)

○題

城 萍 寄 池

青い目玉の白髪のお爺さんとぼくとぼくと杖ついて何処の里に行きなさる。聞けば面壁九年とか。そいつは少々永くない。七瀬八起は浮世の常よ野暮を言はずとまあ坐れ。番茶の出花でも飲ましやうか。
善いも悪いも白雲の浮ぶ碧りの空の色。幸も不幸も幻の有るか無しの他住居。お爺さんお年はいくつと尋ねたら阿弥陀さんともない年。わしは息子の釋迦どのは。言ふた言葉に嘘はな。そこでお隣のお寺のお和尚さんに聞いて見たら
祖師再来の意はこれいかに
問へどこたへず 春雨のふる。

萬難も笑つて散らん梅の花

創作

平和

34

百合子

或日曜の早朝であつた。妻の露は大洋一に誘はれてしづくと
 答へた。蠅が居るでせう。それになにか小さい刺す虫が居ま
 せんか。「スラッススス履いて大きいストロ―ハットをかぶつ
 て行けばよいだらう。だんく暑くなる」と女の足でつわうと河
 まで歩いて行く事は出来なうからぬ。僕は今日は奥よりも亀
 の大きいのを釣りたいと思ふ。
 早く仕度をしなさい。妻は出掛けるとなると兎角暇がかゝる
 からぬ。言ひ捨て、洗面所に出て行つた夫の後姿をボンヤリ
 眺めて。言ひ出したらまげぬ気性をよく知つて居る露は一人
 淋しく留守するよりむしろ二人して出掛けた方がより楽しい様
 思はれて急いで出掛ける仕度であれこれと始めた。結婚して
 早十年の月日は流れたが子供の恵れぬ二人はそのため淋
 いささ味ふ事もなく信頼し合つて居る仲は側で見る目も羨し
 い程だ。妻に貞操が在る様に夫にも貞操がある筈だ。夫の持
 論を裏書する様な日々の二人の生活である。
 よく近所の奥さんが御宅や何年経つても結婚したばかりの
 様で、お前を言はれて露はホホと笑ふ事がある。
 やがて二人は登山でもする時の様な姿で新緑に薫るマスケート
 樹の間の小路を奥へと進んで行つた。

妻の露は怪しいものが居ると足をとめたりして近付いて見
ればそれは眞黒く焼け残りのマスケット樹の様であつたり野放
しの馬に出逢つてはビツクリして其度に夫に笑れた。妻のこ
うした弱い心をいとはしく思ひ乍ら妻を助けてやがてつづら
ド河へ着いた。目の前に横たはる雄大なそして神秘的な大自然
に向つて露は言葉少なに「まあこんな沙漠の中にこんな景色の
よい川が矢張来てよかつたと思つた。

大澤一も額に右手をわざして遙に河の面に目を注いで居る。
露は始めてこんな大自然に接した故に腋の下がザラツト冷へる

様にさへ感じた。やがて二人は川を一面に見渡せる涼しい木
蔭に陣取つて川風を心地よいまで薄着の肌には味い乍らランナ

に進みませんがこんな涼しい空気のよい処ですととてもおいし
く食べられるものです。

たまにこんな処に家族連れで来るのもよいね。これから氣候
は暑くなる一方だ。お互に健康に注意せねばならぬよ。

甘黨の二人はテヨフレイトを持つて来る事を忘れなかつた。い
つか夫は仰向に寝ころんで持つて来た本を読み續けて居る。

側で露はテヨフレイトの甘さを口の静かに味ひながら廣い
額にふりかゝつて居る夫の黒い髪の毛を指に巻き付けては

さ上げて居る。露の思ひは郷里に走つて居る。二人は故郷の
祖母の許でどちらも育てられた二世である。相寄る二人の心

はやがて周囲の人達の許を得て櫻花咲く陽春に結婚して南加^{父方の住む}に来たのであつた。

夏の裏山は美しいむせる様を濃い緑に包まれてカウ鳥が鳴いて居る。あちこちの窪には薄紫のあやめの花が沢山咲いて居った。陽は梢の葉のすき間から透して地の上にまげらに照つて居た。こんな景色のよい処へ来たせいひ郷里を偲ぶ心が次々と連想されるのである。何をそんなに考へてゐるんだい。

「お祖母さんは近頃遠者のしら。この間赤十字社を通して便り出したのですけど、妾をあんなに可愛がつてくれたお祖母さん、もう一度逢ひたいわ。」

「遠者な人なつたから大丈夫だらう。平和になつたら一度日本に飯るのだね。お祖母さんを連れて山の温泉へでも行くのだね。温泉をう近いだらう。」

「それでも十二三里ありますよ。」

「汽車で行くのだから年寄りでも心配ないよ。」

萩の花や小百合の花が沢山咲いてた山の温泉が目に見える様だ。どうそろそろ出掛け様か。ボートで向の島に渡らう。ボートは

あちらの岸に繋いであるのを見付けてたとして夫は間もなく岸を漕いで持つて来た。而して妻を助けて乗ひ乗つた。二人は片方づゝ櫓を握つて河を滑るが楳に下流に流した。そしてたぶん鳥の方へ近付いた。水けドツツリと濃い藍色をして居る。大分深くなつて来た様だね。川の中から眺めると向の岸に

「続く新緑のマスケット樹の森はとて美しい。
戦争がもたらした幸の浮世をよそにフロラ河に船遊びとは
全く思ひがけなかつたね。
向の浅瀬で白鷺が一匹長い首をかしげてこつちを見て居る。
河の面に漂ふさい波は初夏の陽を受けてキラキラと光り輝い
て居る。二人の平和な心を祝ふが如くに」
(完)

モハベ

俳句



四季雑詠

湖月編

五十住静遊

釣の友今日は遅れて来りけり
今日も亦小鯉ばかりや良く釣れる
良く釣れて鯉の始末に困りけり
日端となりて釣場の静かなる
釣暮れて帰る小徑やカヨテ鳴く

安升乳海

晝寝人起きたる顔の金みそり
めつふりて待ち居る子等に天瓜粉
行水や眠むたがる子をつぎに

37

躑躅きて飛び上りたる跣足かな
冷奴喉なだらかに下りけり
歩むまゝ、酷暑の砂塵まつはれる

篠田香虎

菜園に一筋残る胡麻の花
童の逃ぐる脊中や天瓜粉
水盤にすくしきや甘藷の蔓
泳場や旗を揚げたる救護班
芝刈るや折柄通る撒水車
捕はれて罫の中なる小蟬かな
入所一ヶ年を憶ふ

安川不似郎

去年の今日を語り合ひて庭涼み
昨日一つ今日は三つ咲き牽牛花
朝顔やあかるき庭の人通り

炎天の埃柱やいんてん礎いし

末子のねだる西瓜を切りけり
沈む日にあがる埃や撒水車

小田華泉

割り西瓜さぬの廻りの薄黒き

講堂の大電燈や夏の虫

其下につぶら重なるトマトかな

潮の香のころく流れて避暑の宿

かり立ての花に遊べる小蟻かな

小島生

会釋して過ぎし女の日今かな

姉よりも妹の背高き日今かな

裏庭の葉の下蔭に初茄子

もいで見ていよく黒き茄子かな

鉤場より加州の空をながめけり

青木流水葉

夏窓に瓢も一つ下りをり

夏朝を躍る波紋や池の鯉

炎天を伸び行くキヤストレンス哉

汗けみし髪も洗ふて扇風器

花籠に朝顔の蔓からみ咲き

小林千代

俳人となりすましたる登山かな

濃く薄く重り合ふて夏の山

緑蔭やおちこち光る岩清水

夏草の中に埋れる道しるべ

此処はまたニグロばかりのトット抜き

割烹着トットの上に着せてあり

山北涼水

蒼空へ蝶巻かれ行く旋毛風

今宵また歌も踊りもあると聞く

腹脊に夏山響へ收容所

寝不足に瞋こすりて夏鏡

カウカスの涯なき荒野稲光り

夏朝やわり齒みびきの心地善き

山根愚公

木蔭にも蝶一つ居ぬ酷暑かな

扇風機や初夜仕立てる若き妻

打水に流水終ふせり蟻地獄

和気湖月

空びくろモハベ巖山炎天下

巖多き巖山にして泉なし

沙漠より仰ぐ巖山瀧欲し

巖山の裾の旱の丘なだら

巖山の暮色伴ふ端居かな
三伏の巖山白き雲を吐く

巖山を踏まへて安達太郎かな

次回(九月号) 課題 松の花(夏季) 残暑(秋季) 並に四季雑詠
昨今の百十五度、二十度の酷暑では勢ひ人々がなまけざるを得
ない感じが致します。皆様の作句の上に顕れて居ります。諸
て目下の鎖夏の一助ともなるかと考へ我々の想像を最も涼し
い風光の明眉なセントレー海岸に出懸けたと假想して作句し
て見ては如何です。初歩の御方はセントレー海岸の事を叙し
て松の花を加へるならば大抵句は成立致します故に比較的客
易と思ひます。共々試みて暑さを忘れて見ますよ。他に残暑
の題もあり四季雑詠は例の如し



モハベ川柳

山本延篤

猫の廳長屋の女房うるさがり
新世帯君からイーエ貴下から
誘惑を女將笑顔で逃げて居る

39

運命の錠をまわした汽車が爰に
四十年祖國に清まめ年の過ぎ、
撫でる手を柔順に受けて傳書旭
狗の子を抱いて名前を聞きに来る
岩清水口ツキー遙か雲が浮き
流星が話題にのぼる收容所
騒がせておいて夕立さつと逃げ
山北涼水
大汗に芝居の基詞遂いつまり

瓜一つもらつて困る子沢山
戀男やたらに何か買つて来る
転住所でまた転住と荷をまとめ
短か夜の夢日本に走り行き
初戀を知りて日記を書き初め

城岸寄池

水涸れてありがたわける沙濱所
水なくてこらいつらに暑さ知り
同胞の喜びそうなデマも飛び
デマ飛んで隣の嬢腹を立て

山根愚公

出て行きし子供の靴の大きすぎ
蟋蟀を追ふて室中かけ廻り
婚禮にコトもとれず脊中の汗
賣店で初衣のびらを撰る夫婦

ホストン
文藝 七月蹄俳句校筆

湖月編

関野五松

訪へば糸瓜の花の主人かな
打ち水に纏るゝ小き足跡

朝の蚊の集るスクリンを拂ひけり
吉野竜耳
メロンの香漏れ来るノスに入りけり
夏度や火熨の利さし洗濯着
和気湖月
片陰の潜戸開けて花を栽る
ペウエニマはおほいた縄に徒水居り
夜涼みや池にといかぬバラツクの灯
朝顔の柱の上を競り上る

マンガナリ川柳句会

第五十五回課題 日本語

森田玉兔選

天 竹雨

魂へ強く短波の國の聲

地 寶

日本語を話して下駄の履き心地

人 鳥城

日本語と英語を交えて腹を立て

五客

日本語があやしくなつた仮名使ひ

日本語と思へ程の國訛り

ホストン
凡才
露光

親日の影に潜んだ日本語
ま、事のお客も親の故郷訛り
日本語の集會二世遠く居る

麓氏
竹雨
道子

秀逸

孫の名に祖先を偲ぶ日本語

紫水

國力のびて日本語見直され

同

日本語は忘れたと言ふ日本人

同

日本語も交せて二世の千も動き

巴水

態度にも解る歸米の標榜言語

同

階級へやこしく聞く日本語

同

日本語のラゴオになつて座がしまり

三木

落書に日本語見付けたキマツの子

同

日本語も英語も交せてすむ評議

白雀

幼な子の日本語に家庭覗かれる

舟平

親しみのある日本語で宣教師

露光

邦字紙の活字立場を辛く見せ

玉園

転住で進歩を見せた見の言葉

驢老

母さんの英語日本語つい混り

裕川

他所行きに使ふ言葉へ國が出る

同

國訛り記して故郷に近む村

露南

地圖の色変る地球へ日本語

紫水

必要が是非なく日語使命づけ

孤南

同郷の訛で語るキマツの灯
日本語を話す白衣の得意顔
日本語は下手です親の申訳
親にだけ日本語で書く旅便り

丘上
同
法水
同

軸吟

日本語の んが群集血を沸かせ

第五十六回課題 雜詠

天。苦難にも耐へてけ、笑む皮膚の色

互選

地。貪を子に噓つきの父にする

鏡水

人。レフトを聴いて他國に無い涙

露光

人。寫真帳みんな会いたい人ばかり

三木

客

去る友を追はず心で祈る幸

道子

失敗に帰した努力も買つてやり

同

真黒な髪へそわな顔の皺

三木

アサウニス英語になつて生欠伸

溪山

秀逸

志願した子へ國籍の差を歎き

溪山

今日も亦昼寝を破る練習機

貞子

鳥のやう許されて出る青い空

草露

義理に出る冬着に暑さ強さぐる

露光

日給へちと多すぎる汗の量

守平

巴水 王園 楚民 三木 壽吳 竹雨 同谿 鳥城

影

竹王露守天互
雨園角平眠選

客

竹狂丘
雨月上

露光
梵民
同

秀逸

麓鳥露紫同狂鏡天同王同三白扇睡同守
民城光水月水眠園木雀城羊乎

席題

頭

互選七月十日

天。心友の苦言培しく頭が下る
地。頭角を現す頃に親は居す
人。結局は自己の頭で立つて行く
人。センターの口々へ氣樂な頭数

秀逸

よちくと来る可愛さへ頭で
即答へ頭の汗へをひらめかせ
頭だけ出して務へ軽く居る
頭から吐いた心そつと恥ぢ
忘れ得ぬ頭上に聞た父の聲

麓民 睡羊 竹雨 白舟 露光

名川柳から

女の子鉄をもてば何か切り
通知簿に子は約束を堅くする
ありたけの色を使つてクレヨン畫
真似だけの酌に娘の困りやう
人形へ言はれなへ事云ひまかせ
はんとうの歳は暫く口籠り
あの頃の二人になつて見たい旅
何をしに来たとも云はず大あぐら
迷信でよい信仰を母は持ち
××××××××××

海紅派新俳句

増本美篠

耕すに意氣なく煙草燻らして居る

フリーブランド

フエン太子

西村閑太史

むしあつて夜は遠く故郷の思ひ出
蛙も移り住みしか転住地の池
蝶々花より花へわかれうめわらぬ生活
ひととせ思ひ出秘めて強く生きなん
息をもつぎえぬ眞夏のボストン

往年エタ炭坑の長いエンツリーを歩きながらよく口にしたものだ、

九列炭坑部

鐵火打ちとも知らずに惚(ほ)水た
あすは鴉(カラス)の啼き別れ。

親分頼むと血刀提げて坑内くわりも親の四割(よっぺ) (作りうへ)

44
 ち月号くすのせ氏作やくのふ別れの歌詞は痛恨であつたので一首、
 甘菊水の清水の場来流れてる早もはるぬ濁り棒の瀬
 北木田崎南忍れ奴風はエコーソン論文集にでもありえうで其哲理が面
 白いで英譯して教えた。(意譯。くすのせ附記)

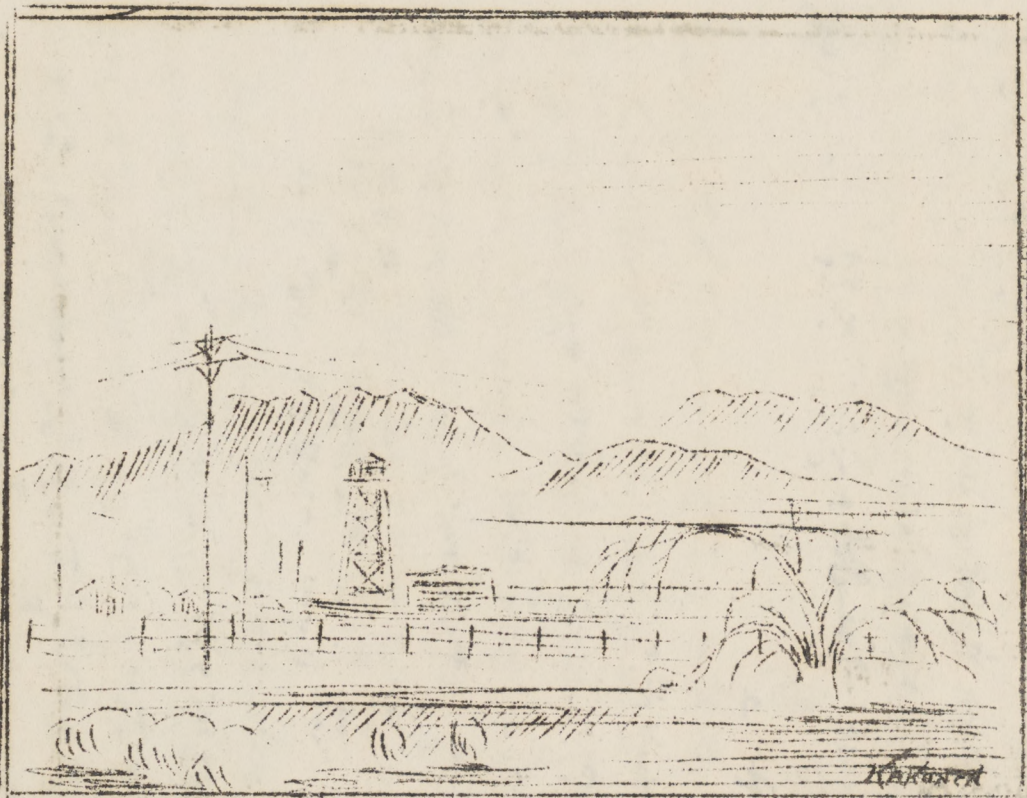
The Yanko Hite.
 Oh! What a cute thing you are
 Yanko Hite! So high up in
 the sky: the higher you are the
 more you work without a
 moments rest the higher the
 position the less physical work
 in the human race. But for
 you the higher you are the harder
 work. Oh! my dear Yanko Sakko!

あゝあゝうゝい奴風、汝も
 如何に穴を高く登りし
 ことよ、高きたよりけ
 誇るを休まぬ働す
 働く働す、人は高き
 に即れば安楽を追ふに
 急まず倦まぬ働む汝
 あゝ故をたす奴風、

消息

客員 西隆治氏 シカゴへ移住、
 同人 柴田勇氏 コロラドへ移住
 同人 安武星次氏 デトロイトへ移住
 編輯員 野田文子氏 人員淘汰へのため皆様に惜まれながら退社。

うきと城意ふる思ひわ



POSTON III

短歌
八月份

拜稿

山田起美

雨も来ず雲も水やうに
照る者——道中の人

脂陰類

里山北^ね嶺^ねなるをきり
家^かの^のあふ^ある^るを^をい^いふ

芝山先生

有暗
樹北
不帝
是

心み
徹る
意
ち
ち
み
を

之
五
城家
ふ
有
友
此

卷之五 門光 胎廿四之序

あゝまをわがうそつぐいなきみゑ鐵壁をいとし灯つゝあゝ
すわといふもをとおもふ砂ありに映画みる誰たゞ不息のむ
きんぬらひひわをわわのおちつけずさばひるしあやしおふ日あ
ひよりあやしはまきびしけとこれあのみあやまきむまきゆん城
マンザの師ふ給ひ給に天竺の美名窓にありて并われりとは李

元華村に在せし松田御夫妻の一方を
御親切身に沈みて嬉しく思出づるまゝに

鈴

子

老の坂多き吾とま今もたはなむいづるびも君がみ情に
 言ふに易く行むづるや、おそれわざ示すに思尊きううを
 和らぎ心失せぬと今此世ありて人道^{みち}傳へまを君にき何程
 人の^{みぢ}成りたるまことうへなむ行ひまらぬ身方君に頼らぬ
 世の^{つね}成れば人になしむぬほくま親君が御心^{とけ}あはるあ志^{こころ}あしむ

田中恒太郎

秋衣あきぎあるはや秋風あきかぜも清きよくやうき道みち地ちある友ともを思おもふ秋あきは
 友とものちねにインターンインターンなるまのりあるははぐりぐと今日の晴はれを
 ふ味あじあうびに星ほし城しろ眺ながむる芝草しばくさや今日けふは秋思あきおもひの一ひと日ひも暮くれつ
 岩山いわやま北きた壁かべ衣ぎさうやうに影かげあるをか刈かりけ方かた小陽こようを落おとんとけ

夢を思涼

良

夢を思涼を乾きし草原を人住み初めたる草のや
夕映えれ色とりぐれをそのあやうれる所に柳をくえゆ
床はふぬにうれる顔顔影ゆめける己の夢を
夕を柳おづれ下暗みに涼み人れたがみ語れ
たがみれぬやれ煙をうける軒端よりわきかた顔の花
少夜つけ物静まれる夜をゆけをぬれるぬるぬる影

寄水思涼

記保

ぬるぬる花をすくえぬ夢をうるとも思を志る
クーラーにあるぬるぬる音立てる色をれぬは涼しさを
コラドの河の流れるゆるやうな家におもひをる
ぬるぬるをききぬるぬるをききぬるぬるをききぬるぬるを
わやどれ家への柳をぬるぬるをききぬるぬるをききぬるぬるを

夢を思涼

巴流

現るぬるぬるの夢にぬるぬるをききぬるぬるをききぬるぬるを
ぬるぬるをききぬるぬるをききぬるぬるをききぬるぬるを

泣きぬれ 眼あられを夕陽より赤き霞の空のうつろひ
望と日れむつち 一はれをひききくふれくつとありあはる

夏の夕

わがふひ 芝草ふふ母とふか何れ語ふ夕涼に
暑竹とまぶ 楊柳に七色の短冊にけく霞ありせむ

夏の述懐

あそびのうつろふ樹に 諸人不知
あそびのうつろふ樹に 諸人不知

九時とふふあはる夕とて 暮るに空たつとあるふふのはた
夕とてふれそふあけに 暮るに空たつとあるふふのはた

夏の述懐

阿 屋

夕陽に 夕陽に 夕陽に 夕陽に 夕陽に 夕陽に 夕陽に 夕陽に
夕陽に 夕陽に 夕陽に 夕陽に 夕陽に 夕陽に 夕陽に 夕陽に

夏の夕

極 坂 標

あふれの祖國の夢をいふつ 捕われぬとて 夢をいふつ 夢をいふつ
眼ふふふふふふふふ 亡き人を思ふふふふふふふ

姑の七廻忌を言ひて

何と云うものいひたげのうらゝあを香々懐りれ影よぬるがを
三年の事か不甦をみえり、多量とありし日乃あつて
あづかりの花を接げを思ひぬふ姑の姿のわをれがめをす

詠の付後々

簪え立つ水のタンクをあめれおつるをぶきう水をあもすが地
影よと花に散るを影に夕日もえり、虹の橋をうめれ砂をふ

盆の月

小林 千代

いとちふきふちふちを思ふ趣味の道思ひたつる道の為にあ
せけしきと書るるを作るいとちふきふち月照るを思ふ趣味のと
歌の友一人ほしきれあつ夜あら仰をみえに盆れ月照る
るうすれをえげし竹む盆れ月を思ふ今宵思ひやる歌
盆の月あつちふちふちを思ふ一ツ盆れ月を思ふ何に思ふるも
思行きてあつち近所の人多きも思ふ心のわたりを思ふ
あの中にあつちやすき人思ひ人をも思ふも恨めし
うむけはつちを思ふさ次道又行くと思ふも同ド道うめ

入所一週年に

長谷川 蒼逸

真言 行と先きも身のなりぬ起も識らずて追をれてあどし去ぬの
 十六日 ひとみ心を心細くも歩みあへ尚は行とさきあ定ぬふらざる
 全 思ふとも甲斐なすも想ひたりをどしとあまきぞしあふふ
 昔 生きたる陽焼けつと砂土に男のまきる教然と起ちて働くと
 雄

百合子

朝明けの空よりあをる風や、あどく吹て焼けけは呼き吸ふもとる
 空みふる空の太空にあらるのいと雄大に浮び漂ふ
 空のわかれぬ思ふもふ一人外ふちでね空に仰けらけ欲あけむ
 傍るあぬかぬのなとる空の空花にもさる空にほきにほり空

西 空 砂

遠く代の仙名拾ふを踏みふるアリゾナ根をあらく走あふ山
 舞けく空をたまふもよみ空の空を舞てして仙とふあ飛
 空の空の灼くものい照るゆ空の空を舞ありさき空の空
 炎天の日向空の花うつむける空を舞て空の空を舞て空

ホストとよる

(丁君の乞ふより大寺教材用として書く)
くすのせ

常夏の比沙婆の収容所は五月から暑く、六月に入ると金魚本格的の
夏が訪つた。七月を迎へてからはお陽様の灼熱焼くが如く二十日前後
は最も暑く水銀柱は百二十度まで昂り上つた。屋外では百四十九度あ
り上つた。熱なが百五十度に向ふると木の葉は枯れて落ちてくると聞ひて
居りました。たがトマトの葉が少し焼けた。木々の葉は五月々々として居
ります。比沙婆の家はたがのこともありません。六月からはホストと名物の芋
節風が笛のやうに鳴つて来も吹き折られるが、家も飛ぶかと思ふ程吹き来
ます。一年の雨量三寸以内と申すから如何に乾燥してゐるかに想像出来
ます。よう、一年分私等の入所當時はメスキートの自然林を焼き拂つて其上に
ブラツを急設した。すぐ住み込んだので茶涼たる灰の上にあたりわけて、家
の周囲には一草も無く歩けは靴のめり込むで眉を擡めました。強い風
が吹くと其灰を煙のやうに飛ばせすから粗悪な建物の板戸の隙から侵入して
掃ひて、一夜の内に埃が積ります。少し自然をなする日本人の収容所
です。皆人草木を植え、水を惜しげもなく流します。たの道も堅ま
り縁化せられて風致を一新しました。入所當時は虫類も焼けて死んで
仕着つてゐたのです。人住み草木茂ると同時に蟋蟀や蠅や蚊が繁殖して
撲滅法を講じねばならなくなりました。蟋蟀は着物やシーツを食ふの
です。蠅は一鳴いて心を慰めてくれる。ジリと蟬も低い木の枝にとまつて整人に
歌つてくれます。私等も暑さは卒業し埃の訓練も充分受けました。たので
日々の生活も板につく。住めば都の心地がします。然し一日何なとなく整衣
つて来る雷風には、うんざりさせれます。秋旋風は埃の柱を朝顔の花のや
うな形に立て、走つて来ては行きます。その埃の柱が天に沖して移動し

て行くのは本考に倣観です。昨年はあつた大きい龍巻きに見舞はれて一館
府では屋根が飛んだり怪我人があつたりした。時には山岳地方や太平
洋より風が来ますが大陸から来る風は沙漠で熱を高めて来ますので其
風に見舞はれると湯の中を掻き廻す様に却て暑く汗がだらり出ます
私等は一日二カロン程水を飲みますが飲むとあつた汗にふります。然も
其汗はすぐ乾いて塩になつてやういします。あんなに水を飲んでよく腸を
悪くしないものだと思ひに思ひます。まあ私等は今のところ乾汗機
械です。

夜散して夜から朝にかけ一沫の清涼に終日闇熱の疲労を取戻します。
夜のホストンは誠に爽快で胸の透きやうに澄んだ大空に数知れぬ星が
美しく瞬き出はせしナードを差します。静かに耳を傾けると逞しいのや、あどけ
ないのや、祈るやうな泣くやうなのやあつてそれ。個性や感情を表現して居
ります。

アリゾナ州は十六世紀に既にスペイン人が移住して居ります。

アリゾナといふのは西班牙語で小さい水といふ意味で、詩的で優い名です。昔から
多くの礦山がありました。アリゾナは礦山町の名で、然も其持主の名がアリゾナ氏
であつたと申します。つまり小泉さんと云ふ人、礦山の名が州の名になつたのを
昔からインディアンが澤山居つて白哲人が驚く。此州の半分はインディアンの特別保
護地となつて居り地名は大部分インディアン語が附けられてあります。

今から三十五年前の千九百十三年はじめて合衆國の一例に編入せられまし
たので米國では一番若い州です。然し廣さは第五番目で日本の本土より廣
いのです。以前はテリトリイで只今のハワイの如く州ではなかつたのです。
此州の誇りはグランドキャニオン公園で雄大な懸崖が光線の具合で色彩
が刻々変化する壯観は近界を不思議の一つで、其から廿哩程の所に記念碑が
あつた。

地理的に申すと山脈地帯、高原地帯、沙漠地帯の三つと云つて居ります。後者は太古のまゝで、コロラド河はワイオミングから流れて来てゐます。此河がネバダ、や加州の境となつて居ります。川の西に寄つた所にサレートバースンといふ大平原があります。

ホストン附近は元アイカス大尉がコロラド平原と名付けました。たか七十九年前アリゾナイデフン事業監督官チャリー・デ・ホストン大佐の名をとつてホストンと改名しました。コロラド河畔、印度人保護地の一つで本開墾地が東西二十哩、南北四十哩ある。七万二千英畝あります。七十三年前運河の爲め運河を掘る時の大統領と印度人保護官の名を取つてグラント・デント運河と命名しました。たか度々の洪水で崩れて仕舞ひました。四十五年前新式機械を用いて再び開墾したので、バーカー附近に八十英畝の畑が出来ました。昨年から今年一杯にかけ、百万弗の総算で、オレゴンから第三鎮府にかけて六哩の運河を掘つて居ります。それを完成すると一万余英畝の畑が出来ます。土壌に塩分多く農業に不適當である事は今年メロンやトマトで試験済みです。察するに太古アア(MAH)大陸が太平洋に陥没した頃、此附近は陸になつたのではあります。いか、鬼も南く地質學上此土地は海産物が成り上つたもので、氷海時代、ロッキー山脈が出来つた頃、何れも生れたものが、此は千里の路程、又は森林地であつて、澤山の噴火山も有り、た、落石や動植物も、海陸の産物の化石が多ひのゝ証據として居ります。西方の山は其山脈から貝の化石が出ます。コロラド河は氷年泥砂を押し流して、此を海抜三百三十呎の高さにしたもので、三三三のフロックの如く、六百呎の井戸を掘ります。たか河川の堆積物特有の埃と臭気がある飲料に出来ません。で、三五の如くに千五百呎の井戸を掘りました。之は地盤に深く掘り下げて堆積物の層を突破しました。不潔、清水が湧き出ました。で、我等は三つの鎮府の中で一番上等の水を飲んで居ります。

鎮府のすぐ南隣の黒山(ブラックヒーク)は名の如く色の黒い山で此山だけは太古か
 ら海中に屹立したもので金山と云ふ花崗石からなつて居ります。此山は真ん中か
 ら真つ二つは割れ目が透つて居りますのでインディアンの傳説の山になつて居ります。
 金山として掘られた坑道も残つて居ります。コロラド河も此附近は砂金の産地
 として透に知られてゐましたがなを洪水で泳城を異動し埋没したので今の河
 は新しいのといふ層を流れてゐるので金は無いといふで、人誰か、八十一年程
 前に此河の流水たを掘り當てたならは金鉱を考見出来る筈です。
 此の先住民はモハベといふインディアンで、三鎮府から南へ、ニードルの町から
 北にかけて、かなり廣い面積を領有して居ります。た、タウライフは此附近で只
 一つの群民として透に記憶せられて居ります。彼等は元々此処を根城としてゐた
 ものが、何年頃から土着した人判然とせしめ、彼等は原始人の如く農牧の民で少
 しばかりのコーンやポニキンを耕作し、野生の草を收穫したり、又獸狩や漁獵
 等やつて居ります。た、先天的好戦人種でユマやコパスと絶えず闘争を繰
 けたと衛生思想の發達しない為めに人種は逐年逐滅して現在では約八百人位
 しか残つて居りません。武器には一種の信仰を持ちアメリカインディアン中でも一番精
 巧な石の矢尻を作つて居ります。た、鎮府附近は當時のインディアンの英雄の夢
 の跡で諸所に煙滅した古戰場が在り、當時の武器や人骨を見受けました。
 此人種の酋長はインディアンの最も色黒く、一番背高く、骨格隆々として風貌魁
 偉逞しい腕力の持ち主ですが、時代に取り残されて今の資本制度に容れられ
 ませんので政府が保護して居ります。或者は附近の所で労働したり、百姓
 や牧畜をしてゐます。平素は柔順ですが少しでも酒を飲むと酒乱になります
 ので政府は彼等に酒類類を飲ませぬ様にしてゐます。土曜日の晩にはワイ
 ルドパーティーを催します。其喧騒狂暴、流石昔々昔々と思はれます。(完)

編輯室より

今度監督官ブルグストン氏の訓令に基き、會員制度にします。會員は會員として一冊分拾五仙收めて戴くことになりました。即ち購讀者と云ふ名儀が會員となります。購買といふ言葉はなくなり、會員を出して雑誌を貰ふといふことになりました。

次号は九月中旬發行します

俳句の課題は 枯の花(夏季)。 残暑(秋季)。 四季雜詠。

特輯号。 收容所生活周年紀念として、今まで本誌に載録した俳句

川柳を和氣湖月さんが選しました。短歌は西真砂さん、門

野篤子さん、林君江さん、山田オノ美さんが選擇して下さ

した。表紙は鶴岡鵬年々の筆、ボストン第三館府の絵で

同氏はハーバートのフレンドソササケの展覧會に入選せられたのを

修字して下さいます。收容所一年の收穫として他日思ふの特

として充分の価値のあると信じます。其他創作、隨筆等長文を

載せましたので九ページになりました。近々配布します。

客員 第一館府 永井氏、西野氏、正木氏。 第二館府 田佐氏、長谷川氏。

第三館府 中島氏、原田慈氏、鶴岡氏、和氣氏。

取次所 第一館府 正木氏、矢砂氏。 第二館府 田佐氏、長谷川氏。

第三館府 成人教育部、演藝文学校。

編輯部 山根貞蔵、和氣田平、楠瀬正美。

